CONFESSIONS OF A YOUNG MAN

BY

GEORGE MOORE

WITH INTRODUCTION AND NOTES

BY

MINORU TOYODA

PROFESSOR OF ENGLISH LITERATURE IN THE KYUSHYU IMPERIAL UNIVERSITY

TOKYO

KENKYUSHA

1927

KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書

昭和二年五月十日印刷　　昭和二年五月十五日發行

主幹者　岡倉由三郎

主幹者　市河三喜

發行兼印刷者　小酒井五一郎

東京市麹町區富士見町六丁目五番地

印刷所　研究社印刷所

東京市麹町區飯田町六丁目一番地

發行所　研究社

東京市麹町區富士見町六丁目五番地

電話九段四〇二・四〇三番

振替口座東京二八六〇一番

非賣品

序

George Moore の *Confessions of a Young Man* が最初の形で先づ發表されたのは時事問題及び文藝の雜誌 *Time* の Vol. VI., New Series, 1887 であるが、本叢書のテキストは "Edited and Annotated by George Moore, 1904 and again in 1916" と附記された Heinemann 版 (1917) である。"Annotated" とあるが、著者の自註は前後五個に過ぎず、それらは私の註の中に示されて居る。Heinemann 版には多少の誤植も含まれて居るが、その大部分はそのまゝにして註の中で說明してある。さうした理由の一つは誤植であるのか著者の不正確であるのか判斷に苦しむ場合もあり、また何れにしてもそのまゝを寫すことが當時の著者を偲ぶよすがともなるからである。

この註釋を書くに當つてそれからそれへと必要に應じて參照して行つた書物の名を擧げるとなると際限がないから、此處にはただ著者及び其作品に關する有益な知識を供給された John Freeman の *A Portrait of George Moore in a Study of his Work* (London: T. Werner Laurie, 1922) を擧げて置くに留める。なほ直接註釋に關した方面では叮嚀に校正刷に眼を通された外、特に私の手もとに在る材料で調べ得なかつた數項の疑問に答へられた市河主幹、また同じく懇切なる校閲の際特に說明の中のくだけた言葉遣に關し種々暗示を與へられた岡倉主幹、また佛文學の方面に於ける私の質疑に應ぜられた九州帝國大學の成瀨教授及びボノー博士に感謝の意を表する次第である。

本書の註釋には之まで私の書いたこの種の本の何れにもまさつ

て多くの勞力を費したのであるが、本の內容の性質上註釋の完全を期し難い點もある。それらはなほ將來の研究に俟ち、後の機會に補ひたいと思つて居る。「緒言」はいふ迄もなく註釋と相俟つて本文の理解を助けるのであるが、特に本書の如く「告白」を內容とするものにあつては、之を理解せんがためには先づ著者の人となりと傾向についての概括的知識をもつことが最も肝要であり且つ便利である。その意味において本書の研究者は必ず先づ「緒言」を通讀されたい。

[附記。前記 Heinemann 版の *Confessions* の title-page には "Edited and Annotated" 云々中の年代の外、題目の直下に "by/George Moore. 1886" と記されて居る。但し *Confessions* が初めて書かれたのはやはり *Time* に出た年，即ち 1887 年であつたとしか思へない。1886 年とあるのは誤植でないとすれば其年に起稿したとでもいふのであらうか。それにしても John Freeman は *Confessions* が 1887 年の夏 Southwick で書かれたことを明記して居る (Freeman の本の p. 79)。結局 1886 年は Moore 自身の思ひ違ひであらうか。*Confessions* は Moore の bibliography には普通 1888 年となつて居るが、それは單行本として發行された年である。]

昭和二年 (1927) 四月福岡にて　　豐田實

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook

INTRODUCTION

[George Moore が辿つて來た道の全體に亘る詳しい研究は John Freeman の本もあることであるから、玆には彼の人となりの一般と、特に *Confessions* にあらはれて居る彼の藝術巡禮の旅の跡を總括的に述べ、それに其後の彼の發展の徑路を簡單に錄記したいと思ふ。]

I. George Moore の家と生ひ立ち

彼の家は *Utopia* で有名な Sir Thomas More (1478–1535) を祖先に有して居ると言はれて居り、Moore 家傳來の家寶の中には幾つかの Sir Thomas の肖像があるとの事である。さうして彼の子孫の一人が Ireland の Mayo 地方に定住して Ballina の近くに土地を領し、William of Orange の頃には George Moore of Ballina は Vice-Admiral of Connaught の稱號を帶びて居た。なほ Moore 家の系圖に關しては *Confessions* の著者 George Moore の弟なる Colonel Moore の *An Irish Gentleman* (George Moore の序文がついて居て 1913 年の出版である)と題せられた父親の傳記中に詳しいのであるが、それによると豪家としての Moore 家の基礎は小說家の George 及び Colonel Moore の great-grandfather に當る George Moore によつて据えられたとの事である。この Moore 家中興の祖は Spain に渡り、富有な Irish Colony の頭となつて巨萬の富を積み、刑法の網を逃れて來た Irish Spanish woman と結婚したとの事である。彼はやがて本國に歸り Lough Carra を俯瞰する景勝の地 Muckloon をトして邸宅を構へ、Moore Hall の階段に坐して湖心を見つめたことも屢であつたといふ。さうして彼は「私は廣く旅をしたが、Lough Carra 程美しい景色を見たことがない」と言つた

といはれて居る。然し不幸にして彼は後年盲目となり、Straid Abbey の近くの Protestant cemetery に埋めてくれるやうにと遺言してこの世を去つたのであるが、Irish Spaniard たる未亡人はその言葉に從はずして彼の屍を Ashbrook の Catholic chapel に葬つた。この事は作家 George Moore と宗教との關係にも間接に緣があるから述べて置く。

この Moore 家中興の祖の嗣子 John は 1798 年の戰爭に關與し、一時は旗色がよかつたが、遂に敗北して其結果死を早めることになつた。それで家督はその弟の George が嗣ぐことになつた。彼は Earl of Altamont の孫娘と結婚し、家事は一切有能なこの夫人に任せて、自分は圖書室で歷史と哲學の研究に餘念がなかつたらしい。但し小說家の George が *Vale* の中で言つて居る所によれば、歷史家の George は其先輩 Gibbon の如く一個の agnostic であつたといふ。且つ彼はその兄を不利な位地に置いた人の親戚であるに拘らず、前記の夫人と結婚したのであつた。彼はフランス革命史を書き死後に出版するつもりで五百磅の費用まで用意して置いたが、遂にこの歷史は世に出でなかつた。但し彼が死後におけるこの書の出版を豫想して "I have had no celebrity in my life. But a prospect of this posthumous fame pleases me at this moment...We are so made that while we are living we think with pleasure that we shall not be forgotten in our deaths" と言つて居るのは彼の孫である小說家 George の性格を偲はしめるものがある。

この歷史家 George の長子、卽ち小說家 George の父親なる George Henry Moore は 1810 年 Moore Hall に生れた。そうして小說家 George の弟 Colonel Moore の書いた *An Irish Gentleman* はこの George Henry の傳記であることは前に言つた通りである。彼はあとで彼の息子 George も暫く學んだ Birmingham 郊外の Catholic の Oscott College で敎育を受け、その學校から出て居た

雜誌 *Oscotian* の編輯者の一人となり、この雜誌及び *Dublin and London Magazine* に詩を寄せた。彼は數百行に亙つた *The Legend of Lough Carra* を書き、an Eastern Byronic poem である五百行の *Irene* をも書き終へた。彼はこの後の詩に關して、"If I could get one hundred pounds from one of the booksellers for the child of my imagination, how happy I should feel in buying you a pair of handsome horses" と家の母親に書き送つて居る。*Irene* は出版されたが、百磅や馬に關する消息はない。彼はまた繪畫にも興味をもつて居た。彼は其後 1827 年 Cambridge の Christ's College に入學したやうであるが卒業の記錄はない。

彼は二十二歲の時秘密な婦人關係を母親から發見され、彼の方ではそれを思ひ切ることができず、母の方では承認することができなかつたので、彼は英國を去ることをよぎなくされ、1832 年に結婚は決してしないと囁いて出かけて行つて五ヶ月の間 Brussels に滯在した。それから英國へ歸つて間もなく、東國の旅に出かけたが、その裏面には婦人關係があつた。彼は Caucasus, Persia, Egypt, Syria, Greece から Russia 迄も放浪の旅をした。其時の彼の手紙をまとめて出版せよと勸めたのは Maria Edgeworth であり、其時に既に出來て居た夫人も勸めたが、文名に無頓着な彼は其手紙の大部分を灰にしてしまつた。彼の長子 George Moore は、父は自分の中に潜んで居る文才を妙に覺らなかつたと言つて居る。ともかく彼は文學のために文學を愛することを知らず、之が父子の間の疎隔のもとゝなつた。その後の彼はたゞ馬と獵に浮身をやつしたが、1847 年故鄕から選出されて M.P. となつた。彼は Frederick Lucas 及び Charles (後の Sir Charles) Gavan Duffy によつて始められた tenant-right movement の指導者の一人となり、(Lucas の死後は彼自身議會におけるこの運動の頭となり)彼の黨中最善の orator と認められるに至つたが、其後も屢故鄕から選出

された。彼は 1870 年四月十九日故郷の Moore Hall に於て突如として死んだ。George Moore はこの時のことを *Confessions* の初めの方 (p. 6) に記して居る。

次は George Moore 自身のことに移る。先づ言つて置きたいのは彼は自分の年を知られることを餘り好まないやうに思はれると言ふことである。*Who's Who* にも彼の生年は出て居ない。さういふ所に原因があるのかも知れぬが、試みに英文學關係の書物をあちこち開いて見ると彼の生年は實にまちまちになつて居る。W. H. Hudson の *A Short History of English Literature in the Nineteenth Century* (1918) には 1851 年、J. W. Cunliffe の *English Literature during the Last Half-Century* (1923) には 1852 年、*Encyclopædia Britannica* (11th ed.) には 1853 年、E. A. Baker の *Guide to the Best Fiction* (1913) には 1857 年とある。終のは餘りかけ離れて居るので一見誤植かとも思はれるが、さうでないことは Lippincott の *Pronouncing Biographical Dictionary* にもさうなつて居ることから明らかである。蓋し彼が生れた實際の年は 1852 年である。之は前記 *A Portrait of George Moore* の著者 Freeman が明記して居り、日本では矢野氏の「近代英文學史」(1926) にもさうしてある外、Moore 自身の *Confessions* からも推せることである。Moore はこの本の中に彼の父親のなくなつた年は明言して居ないが、それが前記の通り 1870 年であることは他の確かな材料によつて明らかである。さうしてこの父の死に關聯して Moore は "no further need of being a soldier, of anything but eighteen" (p. 8, ll. 15–6) と言つて居ることや、その他 *Confessions* の中に含まるゝ他の internal evidence からも、彼の生れた年が 1852 年であつたことは察せらるゝ。蓋し Moore が自分の年を少なくとも自ら成る可く洩さないやうにした動機は彼が *Confessions* の最後の所で言つて居る "were it possible I would be remembered by you as a young man" といふ彼の心が

けをごこ迄も持續したものであらう。

次は George Moore とその故郷との關係である。London からフランスにあこがれ、實際 Paris で二十歳から三十歳迄十年の生活を送つた彼も、一面において故郷の風物から受けた印象を消すことはできなかつた。尤も彼は *Confessions* の中で "All the aspects of my native country are violently disagreeable to me, and I cannot think of the place I was born in without a sensation akin to nausea." (p. 88, ll. 11–3) と言つて居る。然し Carra の湖畔の小高い位置に立つ四角な Georgian house, 高い階段と、露臺を支ふる數本の大きな柱の目立つ Moore Hall, 綠の傾斜面、數哩の湖面に影らう日の光、曉と夕の薄明に包まれ、眞晝の光に輝され、月にほの白き橋と馬と人、これらは父の George Henry の心に消し難き印象を殘した如く、小說家 George Moore 自身の生命の一部分ともなつた。*Vale* の中で著者が故郷への旅を思ひ起す一節、廣く長い水、Kiltoome と Connor Island に沿ふ湖岸の軟かな曲折は肉の目よりも絕えず心の眼で觀得るので、故郷に旅立つことに却つて氣の進まなかつた思ひ出は以上のことを證して居る。母親の里 Ballinafad も近かつたが、それは修道院になつて居た。

然しやがて Birmingham の郊外にある加特力の Oscott College に送られることによつて、Moore の故郷における生活は中斷されることゝなつた。彼は其時九歳であつた。家を出る時には大得意であつたが、實際入學して見るとすつかりしほれて了つた。起床六時半 mass に後れると鞭打たれるといふ騷ぎで、彼を baby として認めてくれる者は一人もなかつた。卽ち大元氣で家を出た彼は終に臆病者となり、健康が堪へられないで再び家に歸つた。その後二年間の Moore Hall に於ける彼の生活は極めて意味深きものとなり、其間における故郷の自然との親しみは消し難き印象を彼の心に殘した。然しこの間において彼が幾人かの家庭教師から

得た所は殆んどなかつたやうである。C-springed coach の中で彼が初めて Shelley の *The Sensitive Plant* を讀んだのはこの頃のことである。さうして其後暫く「無神論者」Shelley が彼の神樣となつたことは *Confessions* の中に述べてある通りである。其後再び彼は Oscott で學ぶことになつたが、其時は Shelley の詩集を持つて行つて課業の最中に秘かに *Queen Mab* を讀んだ。彼が Oscott College で學科の上では殆んど何一つ物にならなかつたのは無理もないことである。彼はどうにかして解放されたいと願つた。註釋の中にも少し書いて置いた如く、或る日彼は食堂を出るとき主事に近づいて、實は私は Shelley を讀んでるのですが惡いでせうか、Shelley は神の存在を否定して居るやうですが、と言つて見た。(Shelley の無神論に關しては註釋の中に說明して置いた。) 然し少年 Moore のこの計畫は旨く的中せず、詩集が沒收されたのみで放校處分には及ばなかつた。次に彼は小さな housemaid に無邪氣ないたづらをして問題を惹き起した。若しこのためにその少女が解雇されるならば、僕は義理としてもその娘と結婚するといふ大騷となつた。故鄕に居た父は Claremorris 迄馬で飛ばし、其處から汽車に乘り海を越えて遙々と Oscott へやつて來た。一體どうしたんだ、といふ調子であつたらう。然し會つて譯をきいて見れば別に大したことでもなかつた。然しそれよりも困つた問題は George が加特力教の慣例である懺悔の制度に從はぬことであつた。たつて告白しようと思へば誰にたつて罪はあるぢやないか、と言はれると、息子の方でも敗けては居なかつた。たつてお父さん、懺悔といふことを疑ふ者にどうして懺悔ができますか。疑ふといふことが惡いのですか、しかしお坊さんたつて疑はもつて居るぢやありませんか……。暫く經つて父と子は Birmingham へ來て先づ Shelley の話をした。父は Shelley の詩を bad verses と呼んだ、然し *Queen Mab* の書き出しは好きであつた。次に宗教問題に移つたが、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook

其時から George の、父の頭に對する尊敬は少なからず低下したこのことである、彼の溫情には服して居たが。ともかく其學期の終る迄は George は學校に留ることゝなつたが、友達に口をきくことを禁ぜられた。この罰は George には大した苦痛ではなかつたが、ともかく愈「さようなら」を言ふことを許可された時の彼の喜びは大したものであつた。

George Moore と Oscott との關係は之で終つた。Moore Hall に歸つて見ると父は馬に夢中である。George もそれに引き入れられて、今少しで steeplechase rider になり切らうとしたことは *Confessions* の初めにある通りである。しかし幸にして父は 1868 年頃幾度目かの議員生活に入り、London に移ることになつたので、George は Ireland における馬をやめて、London の空氣を吸ふことになつた。父親にも繪の趣味があつたことを前に述べて置いたが、George も其性質を受けて居た。彼は父に伴はれて National Gallery に行き、South Kensington Museum 内の夜の class に出席したこともあつた。然し父は、恐らく息子を堅實な人間にしたいといふ動機から、彼を行く行くは軍人に仕立て上げようと決心した。其結果 George は、當時手にをへぬ少年を訓練することに名を得て居た Jurles といふ人の指導に一任された。然し間もなく 1870 年の四月 Ireland に歸省中の父の急死といふ事件が突發した。さうしてこの事件が Moore の方向を一轉せしめ、Jurles の許を去つて Barthe といふ人の繪の組に出るやうにしたのである。その組では Whistler がもてゝ居たのであるが、Moore は初め彼に感心し得なかつた。彼はまた London の劇場とも親しんだが、藝術の都 Paris に對する彼のあこがれは次第に强烈となり、成年に達するか達せざるに彼は Paris に飛んで行つた。Moore が Paris に移つたのは 1872 年の末頃であつた (Freeman の前記の書 p. 65 參照)であつたが、朝の六時半の冷たい空氣に浸された "the

great grey and melancholy Gare du Nord" (*Confessions*, p. 11, ll. 12–3)を初めとして、之から十年間(London へ暫く歸つたことはあつたが)の Paris における Moore の生活、其後 London へ歸つてからの暫くの生活、それは卽ちこの *Confessions* の內容であるが、それに至る迄の橋渡しとして私は今迄のことを述べたのである。

II. "CONFESSIONS OF A YOUNG MAN"

Confessions の內容の大部分は Moore が二十歲から三十歲迄、一生の極めて大切な期間を Paris で送つた記錄である。從つて之を理解するにはフランスの近代文藝史と共に Paris そのものに親しみを有することが必要である。加之この *Confessions* の中に出て來る事柄は英國の文學政治、獨逸の音樂哲學、伊太利の文藝復興、日本の浮世繪師葛飾北齋に迄及んで居る。要するに *Confessions* は時未だ世紀末の爛熟に達せずフランスで近代 symbolism が起り、*vers libre* が生れ、naturalism が擡頭して來た頃の、卽ち人生住み甲斐のある頃の一藝術青年の生きた巡禮紀行である。(この「告白」が初めて發表された年代に關しては「序」參照のこと。) 著者は學校敎育の效果を否定し、自ら大學を出なかつたことを以て誇としながら、それでもこれだけのことは知つて居るぞ、といふ意氣込みで Nietzsche の超人道德、Schopenhauer の意志哲學に迄論及するのであるから、註釋者の方では油斷がならぬ。蓋しこのあたりで本書に關する著者自身の感想を紹介して置くことも無益ではあるまい。Moore はこの書に就て序文中に於て "the adjectives that came up in my mind on looking through these Confessions were 'original' and 'incomplete'" と言つて居る。而して之は Moore 自身の評價のみでなく Walter Pater も亦同じ序文に引用された手紙の中において本書に關して "admiration for your originality" を表明して居る。Pater はこの本の中には私の同意し得ない多くの事があ

るこ言つて居るが、同時にまたかゝる satiric な本にあつては同意、不同意などは殆んこ豫期されて居ないこ思ふ、こも言つて居る。また Moore はこの本を書く前には絶對に知らなかつたこいふ Rousseau の *Confessions* こ自分のを比較して先づ、"His book is life seen in long mysterious perspectives, whereas mine is merely the evanescent haze by the edge of the wood, the enchantment of a May morning" こ言ひ、之に對して同じ序文の他の處に於て "the seed of everything I have written since will be found herein.....It is also a book that may be described as a declaration of ideas and tastes, my love of the best things in modern literature and my love of the best things in modern painting, and my whilom weakness for subtle, passionate women" こ言つて居る。然し "whilom" の字が現はす如く Moore は女に執着はしなかつた。"A ray of eroticism" は彼にこつては evanescent のものであつた。さうしてこの *Confessions* は "the relaxations of the artist" よりも "art" 其物を主題こして居る。が要するにこの書の理解に直接最も必要なものはフランスの近代藝術史こ共に其背景こしての Paris の生活そのものである。實は私がこの書の註解を書くやうにきまつたのは私の洋行前であつたので、London 及び Paris では屢この本のことを思ひ浮べ、殊に數ヶ月の Paris 滯在中は Esplanade des Invalides を見下す下宿屋の一室で此書を讀み、私の財布こ主義の許す範圍内に於て Paris そのものも觀察して見た。Moore のやうな、否それに似たやうな生活さへ、私には出來なかつたことは言ふ迄もないが、其間に得た見聞の一部は註釋の所々に挿入して置いた。

先づこれだけの前置をして *Confessions* 其ものの中にあらはれた Moore の生活の跡を辿つて見ようこ思ふ。

英國の詩人中先づ幼き Moore の心を捕へたものは "crystal name" (p. 3, l. 4) の持主 Shelley であつた。然しその後の London

の生活及び Paris に渡つた頃の Moore の藝術的興味の中心は繪畫にあつた。彼が巴里に到着早々繪の教師を求め歩いたことは *Confessions* の中に委しい。それで先づこの方面のことから話を進めると、初め繪畫に對して月並の考をもつて居た彼は當時勃興しかけて居た Paris の印象派の繪が少しもわからなかつた。Degas, Manet 及び Monet 等が主唱者となつて印象派展覽會の第一回が開かれたのは 1874 年であるが、ともかく Moore に對する印象派の初めの印象は Bedlam ところの騒ではなかつた (p. 33 參照)。然し聰明な彼にはやがて印象派の意義がわかつて來た。さうしてその主唱者等と親しい間柄となつた。Paris の Place Pigalle にある café Nouvelle Athènes, 二つの街路に挿まれて Place 迄延び出て來て居る建物の白い鼻、其處にあるその café の白い顔、その Nouvelle Athènes こそ Moore が Paris の新進藝術家等と朝の二時までも "æstheticize" した所であつた (p. 80, l. 8 參照)。其處で Moore が語り合つた繪かき側の人々の中には Manet, Degas, Pissaro, Renoir, 及び Sisley 等があり、Monet とも一二度其處で話したといふ。尤もこれらの人々は皆 Moore より十歳乃至二十歳位年上の先輩のみで、どうして彼等が私を對手にしてくれたか私にはわからぬとあとで Moore は謙遜して居る。然し一方に於て *Confessions* の序文中に彼は、Manet, Degas, Whistler, Monet, Pissaro に關する最初の讃辭——英國のみならず恐らく如何なる國の言葉を考に入れても最初の讃辭——はこの *Confessions* の中にあるのであつて、さうして時間は其讃辭が適中して居たことを證した、と言つて居る。Monet に關しては、耻づることの外は何物をも耻づるなと Moore に教へたのは彼であつたが、後になつて Moore は然しそれは初めから私の性質にあつたのだとつけ足しても居る。Monet のことを言へば、Moore が初め Monet や Renoir の傾向に無理解であつたことは *Confessions* の三十六頁に記されて居る。Manet に

對する Moore の評價は例へは九十六頁の下の方にもあらはれて居るが、Moore は以上數名の繪家の中恐らく Manet を一番尊敬してゐたやうである。蓋し Moore が Manet に特に共鳴したのは二人に共通の強い反抗心、因襲に逆らう傾向にもよるのであらうが、又一方において Moore 自身 Manet について "Although by birth and by art essentially a Parisian, there was something in his appearance and manner of speaking that often suggested an Englishman" (p. 82, ll. 30 ff.) と言つて居るあたりにも全然理由がないとは言へまい。(この頃の Moore は全くフランス贔負であつたとしても。) Moore の Degas の繪と人物に關する印象は三十四頁及び八十三頁等にある。印象派の二人の巨頭、友人で同時に競爭者であつた Degas と Manet が Nouvelle Athènes に並び坐して藝術を語るのを聽いた Moore はたしかに幸運兒であつた (p. 83, l. 10 參照)。Moore が Degas と知り合ひになつたのは 1876 年であつた。Moore は Degas の人物については豫てきゝ込んだこともあつたが、會つて見れは實に好人物であつた。但し Degas は藝術家たるものは世間の風評から離れて生活し、その個人的の生活は世に知らす可きものでないといふことを主義とし、さういふところから記者達を歡迎しなかつた。然しこの點に關する Moore の考へ方はちがつて居た。さうして Moore の彼に對する尊敬とこの意見の相違とが相俟つて二人の親交を傷けるやうな出來事が起つた。さうしてそれは後年 Moore がこの *Confessions* を發表した時のことである。Moore は之に關する Degas の意見がきゝたくて彼を訪ねた。さうすると、あれなら俺(?)は今讀んでる所だ、なかなか善いね、といふ返答である。これにすつかり有頂天になつた Moore は、先生、記者は嫌だなどゝえらさうなことを言つて御座るが、實はやはり有名になりたくないこともあるまいと獨で合點し、Degas に關する論說を書いて彼の private life を紹介した。(此一文は今 Moore

の *Impressions and Opinions* の中に含められて居る。）さうしてこの論說はフランスで大評判になつた。さてさうなると默つて居られないのは Degas である、Degas は自分の私生活について書いたものとは絕交すると豫て公表して居た。その手前上からも遂に彼は Moore との交際を斷たなくてはならなくなつた。其後昔を思ひ出して、Degas は Paris へまた來たら訪ねるやうにと Moore に傳へたこともあつたが、氣まづくなつた二人は其後遂に會はず了ひであつた。

次に Moore の Paris での繪畫修行者としての生活、殊に粹人としての生活に直接關係の深い一人の友があるが、その事は本書の十九頁四行目の "Marshall" の條下に概括的に註してあるので此處には省略することにする。さうして愈々 Paris において Moore が文學青年として通つて來た道の道標を、其前後をも考へながら、辿つて見よう。

この方面に關しては *Confessions* の百六十頁の終から次の頁にかけて著者自身が最もよい摘要を與へて居る。それによると Moore は四度藝術上の洗禮を受けたことがわかる。さうして其中初めと終りは英國に於てゞあつた。先づ第一は靈が光と美を歌ふ別天地を彼に啓示した Shelley が施洗者であつた。次は Gautier である。Moore は彼によつて見ゆる世界の美とはけしき肉の動きの神々しさとを覺つた。第三は Balzac である。Moore は彼と共に環狀の途を辿つて魂の Inferno に下り、その惱みを見守つたと言つて居る。Balzac に對する Moore の尊敬は非常なものであつた。彼は他の所 (p. 76) で渾然たる大系統 *Comédie humaine* の作家たる Balzac に關して "Upon that rock I built my church, and his great and valid talent saved me often from destruction, saved me from the shoaling waters of new æstheticisms....." と言つて居る。次に第四の洗禮に移る前に Moore は三つの小覺醒を列擧して居

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook